

腸管出血性大腸菌（^O157）感染症患者の発生について

このことについて、次のとおりお知らせします。

記

1 患者の発生状況

- (1) 患者 市内在住の女性（30歳代）
- (2) 経緯 8月6日（日）昼頃より腹痛、下痢が出現。
7日（月）腹痛、下痢は持続。
8日（火）腹痛、下痢が改善しないため、医療機関を受診。
9日（水）腹痛が悪化し、医療機関へ入院となる。
- (3) 診断 8月11日（金）腸管出血性大腸菌O157（VT2）感染症と診断。
- (4) 症状 HUS（溶血性尿毒症症候群）を発症し、現在も入院中。

2 患者及び感染源調査

- (1) 患者の喫食状況調査及び行動調査を実施
- (2) 患者の健康状況調査を実施

3 対応

- (1) 患者及び接触者に対し衛生教育を実施
- (2) 患者自宅等の消毒を指示

4 腸管出血性大腸菌感染症の発生状況【参考】

別紙のとおり

予防対策について

- 食べ物は十分加熱しましょう
特に食肉については、生食を避け、中心部まで十分加熱するようにしましょう
- 手洗いと消毒を徹底しましょう（調理の際、食事の際、トイレの後など）
- 下痢等の症状がある場合は、速やかに医師の診察を受けましょう

【参考】

腸管出血性大腸菌感染症の発生状況（患者数）

	平成 29 年	平成 28 年 同時期延べ数	平成 28 年 総数
	県内 (うち市内)	県内 (うち市内)	県内 (うち市内)
○ 1 5 7	8 (本事例を含む) (6) (本事例を含む)	0 (0)	4 (3)
○ 2 6	7 (1)	3 (1)	3 9* (3 4)
○ 1 4 5	0 (0)	1 (0)	1 (0)
○ 1 2 1	0 (0)	3 (0)	3* (0)
○ 9 1	3 (0)	0 (0)	0 (0)
腸管出血性 大腸菌感染症 計	1 8 (7)	7 (1)	4 7 (3 7)

※○ 2 6 及び○ 1 2 1 の混合感染 1 名はそれぞれに含む。

【 HUS（溶血性尿毒症症候群）とは？ 】

腸管出血性大腸菌（○ 1 5 7 など）に感染した際に起きる合併症で、貧血、血小板減少、腎機能障害を特徴とします。急性腎不全や神経障害等を発症することがあります。